No.2 2009年5-6月（本号300円）　プロレタリア（無産者）の共同政治新聞　http://redproletarian.web.fc2.com/index.html

THE RED PROLETARIAN 赤いプロレタリア

●編集:共産主義者協議会 ●発行所:レッドプロレタリア社 東京都千代田区富士見2-2-2東京三和ビル303スペース303 TEL・FAX03-3264-2735／郵便振替00130-7-638910 ●年間購読料:1部2500円(送料込)隔月発行

プロレタリアの反抗と連帯の砦「新しい左翼の極」を創ろう！

5・15「日本復帰」37年を問う沖縄集会・行動

「主体を再創造しない限り沖縄を甦らせれない」と5.16集会で講演する仲里効氏

例年の５・１５平和行進を含め、「復帰37年」を問う沖縄での政治行動が、日本全国と、韓国反基地闘争など海外からの参加者をも迎えて、多彩な集会、デモと、辺野古、高江での現地行動への参加によって闘われた。

辺野古では、ヘリ基地反対協事務局長の仲村さんに現状を話していただく。１５日の沖縄タイムスで報道された世論調査で県内移設反対が圧倒的に多いこと、１５日に締めきった５４００頁を超えるアセス準備書面を上回る５４００通以上の意見書が寄せられたこと、来年の名護市長選と県知事選が最大の政治焦点であること等々。キャンプシュワブではクレーン車も見え、兵舎や倉庫の移設工事が始まっていた。「アセスも終わっていないのに実質的な建設工事を進めている」と怒りを隠さない。

高江では、座り込みに対する防衛局の通行妨害排除の仮処分申請で大勢の弁護士に協力してもらい、運動が広がりを持ち始めていることを説明していただいた。

５月１５日、県立博物館・美術館にて「アトミックサンシャインの中へｉｎ沖縄―日本国憲法第九条下における戦後美術」。憲法９条と戦後美術をテーマにした展示。大浦信行の天皇ヒロヒトをコラージュした作品が沖縄県側から展示を拒否され問題になっている。当日夜に萱野稔人さん、知念ウシさん、展示のキュレーター・渡辺真也さんなどによるシンポが開催された。

18時から、牧志公園で「５・１５を問う会」主催の琉球処分１３０年、沖縄再併合３７年、アイヌモシリ併合１４０年糾弾５・１５集会。ウチナンチュが中心に横断幕も掲げ先頭に立つ。高江からアピール。発言の締めは沖日労。デモするころには総勢１００人。県庁広場まで行進。

翌５月１６日、アジアから基地をなくす国際連帯沖縄集会（主催・同実行委）が宜野湾市民会館で行われた。反基地を闘う韓国と沖縄との連帯・相互交流を例年積み上げてきた取り組みで、今年も、韓国から、各地の住民運動や文化運動を取り組む仲間たちが沖縄訪問団を組織し、辺野古や高江などの現場も訪ね交流を深めた。

集会ではまず、主催者を代表して西尾市郎さんが「沖縄と韓国、新たな米軍基地をつくらせない闘いは、国境による分断との闘いだ」とあいさつ。沖縄からは、知花昌一さんが三線演奏を披露、安次富浩さん、金城実さん、崎原盛秀さんがあいさつ。崎原さんは、「米軍支配の２７年、返還後の３７年、沖縄はどのように苦しめられ、抵抗してきたか」を問い直し、沖縄の大衆運動のあり方を今こそ検証し、再生させることが求められていると説いた。

韓国側のアピールでは、ピョンテク（平澤）の米軍基地関連の事件・事故、騒音訴訟、グンサン（群山）米軍基地での基地被害、ムゴンリ（武建里）訓練場の拡張問題、１月２０日に起きたヨンサン（龍山）撤去民の惨死（米軍基地返還後の都市計画の不備に異議を申し立て、立ち退きを拒否してきた住民たちを強制撤去・排除で住民５人死亡）の真相究明の闘い、チェジュ（済州）海軍基地建設と海の自然を守る闘い、運動と文化活動の結びつきについて、などの取り組みが報告された。また、今回来沖を予定していたが都合で断念せざるを得なかったムン・ジュンヒョン神父は、ビデオで、「米軍の再編を韓国―沖縄の連帯で阻止しよう」と訴えた。そして、海勢渡豊さんの歌で集会を終えた。

同日、浦添社会福祉センターで１８時半から、「琉球処分１３０年アイヌモシリ併合１４０年『復帰』３７年を問う沖縄集会」が開催された。会場はほぼ満杯で約２００人、半数以上が地元参加者の印象。まよなかしんやさんが主催者挨拶と演奏。１０年前からキャンプキンザーのデモと集会で５・１５行動をやってきて今回で１１回目になることなどを述べる。仲里効さんの基調レポートは「日本国のチビウーヤーはやめ　主体を再創造し、新しいドゥシを探そう」のタイトルで、結論では「新しい友と新たなる政治的共同性へ」と踏み込んだ内容。発言は金城実さん、辺野古から安次富浩さん、高江から佐久間さん、泡瀬干潟の小橋川さん、先住民族の会の渡名喜守太さん、ピリカ実行委の川村さん、最後にアイヌレブルズの若い３人が登場し民族舞踊や楽器演奏を披露すると場内は最高潮。閉会挨拶は一坪浦添ブロックの黒島善市さん。最後に海勢頭豊さんのミニコンサートと盛りだくさんの集会になった。

ゼネストと200万人のデモに立ちあがったフランスの労働者（3.19マルセイユ＝AFP）

５月１７日：宜野湾海浜公園の「５・１５平和行進」を集約する県民大会。集会は３５００人が参加。

５月２４日：「琉球処分１３０年を問うシンポジウム・大激論会」（「薩摩の琉球支配から４００年・日本国の琉球処分１３０年を問う会」主催）。会場は那覇市民会館、参加者は２００人超。ほとんどが地元参加者で、関心の高さを感じた。今年１月に結成された「問う会」は、３月２９日に「薩摩侵略４００年を問うシンポジウムと大激論会」を開催しており、当日の企画はこれを引き継ぐ内容。今後、国連先住民決議をテーマとするシンポも予定されている。関連したシンポが、奄美などでも開催され、さらに先島においても準備されるなど、琉球弧全体を巻き込む議論がはじまっていることが注目される。

当日の基調講演は、金城正篤さん「琉球処分を考える」。パネラー報告は福地曠昭さん「大衆運動と琉球処分」、宮城弘岩さん「４００年の経済支配を問う」、平良勝保さん「琉球処分と先島」、後田多敦さん「〈琉球併合〉を救国運動から考える」。司会の川満信一さんを含めて、活発な討論が行われた。

憲法9条改定を許さない6.14全国集会

・6月14日(日)午後1時
・社会文化会館ホール

(主催)6.14実行委員会

新たな共産主義潮流の建設に向けて

流　広志

共産主義者協議会結成の意義

経済危機が深く世界を捉えている中で、共産主義者協議会は発足した。小さな一歩だが、９０年代以来の長期の混迷と停滞の時代を脱する共産主義運動の新たな一歩を踏み出したと言いたい。

その意義は、まず、ドグマやステレオタイプや固定観念や臆見などから自由に、未来を切り開く新たな共産主義運動と政治潮流の建設を目指すことにあると考える。

そのためには、清算主義を否定しつつ、レーニンをはじめとして、様々なものから新たな可能性を引き出すことも必要である。もちろん、時代も地域も状況も違う１９１７年のロシアでの革命と同じ事をするのは不可能である。しかし、ロシア革命は、レーニン個人の事業ではなく、大衆の起こした事業であるから、その歴史から学び、教訓を引き出すことは当然である。また、レーニンが、どうして、大衆の革命事業の促進に適合する政治や思想を築き得たのか、ロシア共産党１０回大会で一時的例外的措置として条件付きで禁止されるまで生きていた分派容認のボリシェヴィキの党原則は共和主義と合致するのかどうか、彼が言った徹底した民主主義によって民主主義を越える、つまり、民主主義＝国家の廃絶をどうしたら実現できるのかなど、彼が、取り組みつつも実現できなかった諸課題を継承し、今日の条件の中で追求することも必要である。むろん、これは、レーニンやロシア革命に限らず、ドイツ革命、キューバ革命、中国革命、ローザ・ルクセンブルグ、グラムシ、戦後革命、ブント、６０年安保闘争、等々も含めて同じである。

それから、第一インター的な共産主義運動を新たに甦らせることが必要だ。それは、一つには、グローバル化した資本主義に対して、プロレタリア（無産者）の国際的な闘い、国際連帯が必要だが、第一インターは、１８７１年の普仏戦争の際に独仏労働者の国際連帯を作るなど、プロレタリア国際主義の実践を実際に組織した点で、今求められている国際主義の一つの模範的前例だからである。　二つには、第一インターは、プロレタリアートの解放運動を促進することを中心任務としていたが、今日の格差社会化・貧困化・二極化が進んでいる状況の下で、プロレタリア解放を中心的な課題とする必要があることが共通しているからである。共産主義者同盟は、共産主義思想の普及・啓蒙を主な目的とし、ブルジョア革命の中で、プロレタリアートの解放闘争を追求するものであったが、１８４８年革命が敗北して、挫折した。その経験の上に、第一インターが創設された。それは、ブルジョア社会の中で、プロレタリアート独自の運動や組織を形成して、その自己解放闘争を発展せしめようとするものであった。三つには、今日、グローバリズムによる世界的な資本攻勢によって、既存の労働運動や社会運動が築いてきた既得権が攻撃され破壊されている中で、その既得権に依拠してきた労働者組織や政党や運動が無力化しているが、その下には、膨大な数の労働者大衆が存在しており、かれらをプロレタリア側に獲得し移行させるヘゲモニーの構築が求められているが、それには、セクト主義は危険なものであって、スターリニズムはもちろん、宗教セクトなどのセクト（宗派）主義を排す必要があり、まさに、第一インターでマルクスはバクーニン宗派などのセクト主義と闘争して、プロレタリアの自己解放運動を発展させたが、それが今日必要だと考えるからである。最後に、レーニンが晩年に決まったかたちの党などはないと言ったことやマルクスが「百ダースの綱領よりも一つの実践」と言ったこと、そして、今日の情勢を考えても、第一インター的な共産主義運動が新たに必要だと考える。

プロレタリア（無産者）の共同政治新聞『赤いプロレタリア』

私は、プロレタリア（無産者）の共同政治新聞『赤いプロレタリア』が、戦前、治安維持法体制の下で、日本共産党の壊滅状態、労働者政党や組合の相次ぐ転向、天皇制権力への屈服、翼賛化など、困難な状況の中で、最高４万部を発行するまでに発展することを可能にしたと思われる『無産者新聞』の「無産者のための、無産者による、無産者の新聞」という性格を持つ必要があると考える。似たものとして、ボリシェビキが発行し、労働者のカンパや記事提供によって支えられ、短期間で読者を大きく伸ばした初期の『プラウダ』がある。今、このような新聞は存在しない。しかし、現在、グローバル化の中で、恐慌が勃発し、世界同時不況が深刻化する中で、世界の人口が、少数の「持てる者」と多数の「持たざる者」に、急速に二極分解する状況になっているので、このような新聞の潜在的読者、潜在的支持者が、日に日に増えていると推測される。強力な前衛がないというのも、『無産者新聞』や『プラウダ』創刊時の状況と似ている。しかも、「持たざる者」の自然発生的運動が、若者を中心に拡大し、労働運動でもストライキなどの闘いが、以前よりは活発化している。世界の多くの国や地域で、こうした闘いは、以前よりはるかに活発になっている。この点でも、プロレタリア（無産者）の共同政治新聞『赤いプロレタリア』の試みは、今日の時代状況にマッチしていると考える。

世界経済危機と格差拡大とプロレタリア化

サブプライム・ローン破綻を引き金に発生した米帝発の金融恐慌は、世界に経済危機を波及させた。世界経済の０９年の成長率は、ＩＭＦ（国際通貨基金）の見通しで、戦後初めてマイナス成長（０.３％）が予測されている。先進国では、０８年の第４四半期には、実質ＧＤＰが７.５％下落し、０９年第１四半期も同様と見られている。特に、９０年代以来、世界経済の成長を牽引してきた中国経済の失速が大きい。日本では、内閣府が、１０日に公表した、１～３月の速報値で、実質ＧＤＰは、前期比で４％減、年率換算で１５.２％減で、戦後最大の減少となった。これで、「第１次石油ショック時の７４年１～３月期（年率１３.１％減）を２期連続で下回った（５月２０日「毎日新聞」）。４期連続のマイナスは戦後最長。０８年度の実質ＧＤＰ成長率はマイナス３.５％で、戦後最悪。外需は、輸出が戦後最悪の２６％減と、０８年１０～１２月期の１４.７％減からマイナス幅を拡大した。いずれの、経済指標も戦後最悪を記録した。

失業率が上昇する国が増えている。中国では、０８年度の都市部の登録失業者数は、８６８万人で４.２％。今年度は、その目標を４.６％に設定している。今年、農村からの出稼ぎ労働者の中で、失業者が、２０００万人発生し、新卒大学生、約７００万人が職を探している。アメリカの失業率は、０７年の４.６％から、０８年５.８％、０９年３月８．５％と急上昇した。日本の失業率は、０８年の４％だったが、今年３月には、４.８％に上昇した。

この中で、社会格差が拡大していることは疑いないが、ジニ係数の動きを、ＯＥＣＤの統計で見る限りは、一部の国をのぞいて、８０年から００年まで、格差が拡大している先進国が多いので、これは、むしろ、この間の資本主義のグローバル化の継続的な傾向の結果と思われる。それに加えて、日帝においては、一つには、新自由主義的な労働政策、すなわち、９９年の労働者派遣法改悪、０５年の製造業での派遣解禁、二つには、もともと脆弱であった社会福祉制度のさらなる解体と企業福祉制度の弱体化、三つには、家族や共同体の相互扶助機能という社会的に存在してきたセーフティ・ネットの解体等による貧困化・格差社会化が進行した。それには、それを推進するための新自由主義イデオロギー攻勢が伴っていた。

グローバル化した世界経済は、国境を越えて自由に動き回る資本の世界的な運動によって支配され、世界の多くの人々は、無力な存在にされ、右往左往させられ、様々な惨禍・災厄に見舞われ、零落・困窮を余儀なくされている。グローバル化の進展は、世界の人々を、一握りの富める者と多数の貧困者の両極に分解し「持たざる者」・プロレタリア（無産者）を増大させている。この、恐慌が促進した資本の「墓堀人」の大量の登場は、ブルジョアジーの頭に「弁証法をたたき込むだろう」（マルクス『資本論』）。

反グローバリズム運動を発展させる共産主義運動の創出を！

資本主義的グローバル化に対抗する反グローバリズム運動のうねりが、世界的に起こっている。それは、帝国主義巨頭の集まりのサミットやグローバリズムの推進機関であるＷＴＯやＡＰＥＣなどの国際会議をターゲットにするなど、国際的な運動として取り組まれてきた。

また、グローバル化の結果生じた貧困化に抗議し対策を求めて、年末から年明けに取り組まれた「年越し派遣村」運動は、日本社会に衝撃を与えた。それは、格差社会、非正規労働の実態、貧困化の現実を、広く世間に認知させ、政府をも動かした。また、１２月２８日に、イスラエルによるガザ空爆から始まったガザでのパレスチナ人へのジェノサイド攻撃に対して、世界で、何千万という人々が抗議行動に立ちあがった。１月には、フランスで数百万の労働者が参加するゼネストが闘われた。

５月２日の「野宿者メーデー」、1日～４日の「自由と生存のメーデー」、アイヌ・沖縄の連帯を掲げた薩摩侵略４００年・アイヌモシリ併合１４０年・琉球処分１３０年を問う運動や米軍基地撤去を求める沖縄の闘い、グローバル化による農業自由化の波に抗して農業を守ったり、農業破壊・農地の資本への売り渡しや権力による土地強奪に抗する継続的な農民の闘い、「障害者」、被差別部落民、在日朝鮮人、在日外国人などの反差別闘争、そして、野宿者や日雇い労働者の闘い、非正規労働者の闘い、改憲が狙う戦争への人々の動員や基本的人権の縮小などの生存権の否定などに対する６月１４日の「９条改憲阻止の会」の反改憲の闘いなど、多くの領域での闘いが、今、反グローバリズムという包括的なスローガンの下で、「生きさせろ！」と叫ぶ、生存権をめぐる政治闘争と結び付きつつある。

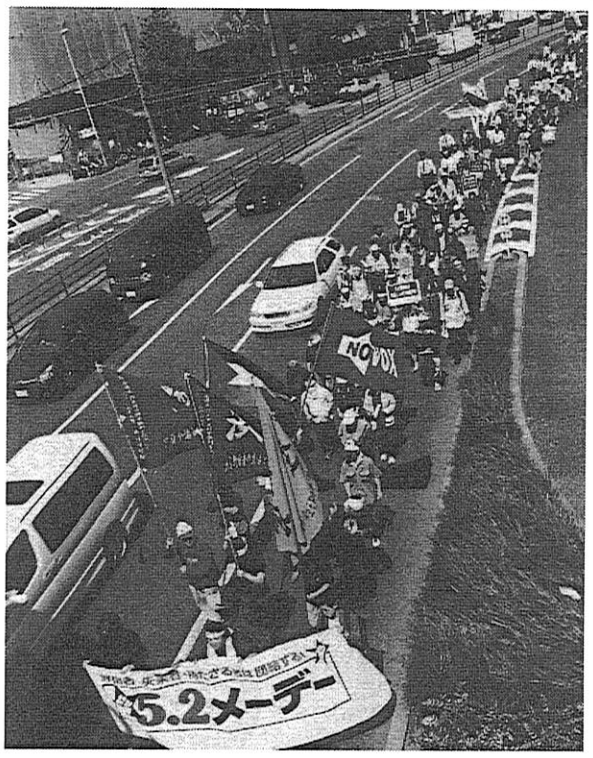
中でも、プロレタリアの解放、資本からの労働の解放がポイントだということから言えば、今、世界的に台頭してきている「社会運動ユニオニズム」の持つ意義は大きい。「社会運動ユニオニズム」は、既存のビッグ・ユニオンを中心とする「ビジネス・ユニオニズム」に対して、労働を軸に多種多様な社会運動を結合して取り組んでいる労働運動である。これまでも、労働運動は、社会問題に取り組まなかったわけではないが、基本的には、組織された労働組合員の利益団体としての性格を超えなかったし、それには消極的だった。それに対して、「社会運動ユニオニズム」は、フェミニズム運動、農民運動、反差別運動、地域運動などの社会的諸課題に取り組み、メンバーの利益を狭く図るという従来のユニオニズムの枠を突破して、社会問題への取り組みを労働運動のミッションとして取り入れたのである。

それらには、「持たざる者」であるプロレタリア（無産者）の全面的な解放の理論意識であるマルクスやレーニンの共産主義意識とその実践と結び付く自然発生的な萌芽がある。その結合によって、それらの解放闘争は徹底的に闘われるようになる。それが、マルクスが発展させた唯物論や資本主義批判や現実暴露や理論的意識などと結合することによって発展し、そのヘゲモニーが、プロレタリアの感性をもとらえ、一つの社会的存在としてプロレタリア大衆の多くに認知された時、初めて、前衛の名にふさわしい実態を獲得できるのである。それまでは、前衛の名は、意志表明として掲げている一本の「旗」に止まらざるを得ない。だから、今は、それを自覚しつつ、レーニンが、晩年に、ロシア革命の再構成を意図しつつも、その困難性を自覚して、「深く学ぶ」ことを強調したことや「大衆と溶け合う力を持たなければならない」と言ったことを、自らのものとすることが必要である。

しかし、今日、資本主義がもたらす惨禍・災厄・零落・差別等々と闘うプロレタリア大衆の自然発生的な闘いが高揚しつつある状況が来たが、それに遅れを取らないことが、共産主義運動に求められているので、実践的唯物論者＝共産主義者として、できるだけ早く、深く学ぶことが必要になっている。共産主義者協議会と『赤いプロレタリア』が、それを促進する場になり、プロレタリア（無産者）の解放の武器となり、信頼の絆を発展させる場となることが必要である。それには、知的・道徳的、感性的、実践的等のヘゲモニーの構築が必要である。また、反グローリズム運動や帝国主義・資本主義からの解放闘争や民族解放闘争や反差別運動などと連帯し、国際的な友愛と正義の絆を形成することも必要である。

力量は限られているが、厳しい時代にあって『無産者新聞』を自分たちの新聞として発展させたような先人たちの実践からも学び、共産主義者協議会と『赤いプロレタリア』を通じて、新たな共産主義運動を創出し、一歩でも前へ進めたいと私は考える。

生存権を取り戻すために
新しい社会運動―労働運動の波を！
＜上＞　槙　渡



新宿をデモ行進する５．２メーデー

新左翼再生の戦略とイニシアティブとは

日本の新左翼運動の立ち遅れた現状（不振、低迷）の根底には、運動―組織を立て直す（再構築する）自己変革意識（換言すれば危機意識）の欠如と政治的イニシアティブ（創意）の喪失がある。

70年代安保闘争敗北以降の新左翼党派間の深刻な内部テロル（内ゲバ）やセクト主義への傾斜が引き金になったことは確かだが、それだけで今日に至る退潮を招いたわけではない。

「冷戦」終焉後、世界を覆ったグローバリズムに対抗して「新機軸」を立て、新しい社会運動―労働運動にシフトする、そういうイニシアティブが求められながらも旧来の思考―行動様式を踏襲し、権威主義的な体質を改められないまま、「旧い殻」を破れず、自らの運動戦略の再構築（転換・変革）を怠ったことこそ総括しなければならない。そして、今こそ自己の「立ち遅れた現状」を率直に認め、左翼運動のベースを再建するために力を合わせ、連携・共闘して戦略的な陣地戦、反グローバリズムの連合・統一戦線を構想すべき時だ。その先にしか「プロレタリア解放」の展望はない。

我々の目標は、「新しい左翼の極」（共産主義者協議会）を創り反グローバリズム運動のラディカルなイニシアティブを創造することを通して、新左翼―共産主義運動を再生することである。それ以外に我々の未来はないからだ。

時代が大きく転換し変化した情勢の下で、かつてのモデル（ボルシェヴィキモデル）が通用しうると考えるのは非現実的・教条的で「対応不全」に陥ると言わざるを得ない。過去の成功モデルへの情緒的なノスタルジーを払拭して、新しい変革のビジョンを構想すること。それができないところに日本の左翼のダメさがある。世界中で反グローバリズム運動や反戦運動が大きなうねりを見せている中で、この国の運動がいわば「周回遅れ」の現状にあるということに危機感すら抱かない。相変わらず一党一派のセクト主義的な駆け引きや狭い利害にうつつを抜かしている「ヘビーな左翼」とポピュリズム的で市民主義に埋没した「ライトな左翼」に二極分化している現状を打破し「新しい左翼の極」を創らない限り、長期の低迷から脱しえないであろう。

とりわけ、「革命か改良か」、「党かソヴィエト（大衆運動）か」という誤った二者択一を迫る古典的なシェーマから脱却できないと変化の激しい情勢に臨機応変に対応する柔軟さを失い、独創的で型にはまらない新しいイニシアティブを創造することはできないのである。これまで我々新左翼は往々にして本来相反する問題ではない――革命と改良、機動戦と陣地戦など――両義的あるいは多義的な問題を単純化して二者択一を迫る愚を繰り返してきた。その結果、視野狭窄になり政治闘争や大衆運動におけるイニシアティブを喪失してきたと言える。

今日、反グローバリズム運動のうねりを起こすための政治的イニシアティブを発揮できないような左翼（政治党派）に存在価値はない。従来の正規労働者の既得権益を代表してきた労働組合運動は、非正規下層労働者を新たな担い手とする「社会運動ユニオニズム」へ、また従来、個別課題領域ごとにバラバラであった社会運動は、貧困・社会的排除に抗し、生存権（社会権）を取り戻すために闘う「新しい社会運動」への転換が、「時代の要請」として迫られている。まさに、そのためにこそ「新しいイニシアティブ」が問われているのだ。

イニシアティブを喪失した左翼にできるのは、羅針盤を失った船のように、ただ従来通りのやり方でまっすぐに進むことだけだ。情勢のトレンド（流れ）を読み対応できなければ、臨機応変に舵を切れず、やがて荒波にのまれ座礁するしかない。たとえ、それがどんなに大きな船であったとしても。

経済も社会も壊れている。政治は劣化し機能不全を呈している。職を失い、住む家を失い、どん底の困窮生活を強いられている人が大勢いる。もう失うものはない。「もうたくさんだ！」と思った瞬間から、絶望が希望への飢えに変わる。心の奥底に怒りが宿り、くすぶり続けてきた火種が火柱となって赤々と燃え上がる。いくつものさえぎる壁を乗り越えてプロレタリアの「怒り・抵抗・連帯」が拡がる。漆黒に覆われた街頭が紅蓮の炎に照らし出され、新しい時代の扉が開かれる。

問われる社会運動―労働運動の新機軸

情勢は一変し時代は大きく転換しつつある。人々は新しい時代の扉を開く変革を求めている。だが日本の左翼は、20世紀のパラダイムから脱却できず、この「時代の要請」に応えるための新しいイニシアティブを創り出せないまま未だに立ち遅れている。旧来の思考―行動様式を踏襲した情勢分析は、ステレオタイプな古臭い切り口の域を出ていないからだ。

権威や常識、既成概念にとらわれない反骨精神を宿していたマルクスやレーニンは、自らの論理がいつの時代にも通用する原理だと主張するような「おごり」はなかった。時代が変われば、求められる思想や戦略も変わる。問題は、その変化を察知して時流に乗り大勢にこびて変節者に堕するのではなく、時代の変化や情勢の動向の根底にある人々の怒り、苦しみ、そして政治意識（権利意識）の現状と行動の可能性およびその限界を洞察し見極める思索に努めることであろう。

人は何に苦しみ、何に怒っているのか。人は何故、虐げられなければならないのか。生きるための権利（生存権）や尊厳のある生活が保障されず脅かされたり侵害・剥奪されたりするのは何故か。どうしたら社会のいびつさ・不公正・不平等を止揚し変革することができるのか。搾取や抑圧、貧困に苦しむ人がいない社会、誰も虐げられたり排除されたりしない公正（フェアネス）・平等で連帯に基づいた社会は可能か、それはどうしたら実現できるのか。これが、社会運動―労働運動のラディカル（根底的）なテーマだ。

我々は、「経済」の語源である「世を経（おさ）め、民を済（すく）う」という原点に今こそ立ち戻るべきなのではないか。逆境が原点への回帰を生み、そこからまた新たな一歩と再創造が始まる。政治にも経済にも共通する原理だ。ただし人間の意識の変革と社会（政治体制）の転換が同時に進むとは限らない。むしろ、それはまれで、「互いに後になり先になりながらジグザグで進む」（西川恵）ことが多い。我々は、戦略的な展望を見い出すまでの最善のプロセスを模索し、イニシアティブを創造し、次世代を育てていく。それが我々に課せられた使命だ。

人は本来、人と人との支えあいやつながりによって生きている。人はひとりでは生きられないからだ。だが資本主義は、人々を「弱肉強食」のジャングルのルールに基づいた貪欲な競争に駆り立てている。競争の原理は、分断である。つまり人々を分断して対立させ競争させる。それが階級社会のいびつさ・不公正さを生み出し、人々の目と耳と声を塞いでいる。

なぜこれほど豊かな「先進国」で、困窮生活を強いられている人々が増大しているのか。競争は、分断と孤立・対立を生み、生存自体を脅かしている。社会的な支えがあれば死なずに済んだ人が一体どれだけいただろうか。

昨年来の「派遣切り」などにより職を失い住居を失い路上（野宿）生活を余儀なくされた非正規の労働者が多数生み出された事態は、明らかに労働市場の規制緩和を推進してきた新自由主義的な社会政策や労働政策による「失政」が招いた「人災」である。労働者に「自己責任」をおしつけ犠牲を転嫁してきた政治家や資本家は自らの「責任」を自覚すべきだ。

働いても生活に困窮する人（ワーキング・プア）が、この富める国に大勢いる。人々の「生きるための権利」（生存権）が軽んじられ脅かされているというこの国の「いびつさ」こそ批判されなければならない。多くの非正規労働者が短期間にいとも簡単に解雇され路上に放り出された。製造業の派遣を解禁するなど規制緩和によって企業は合法的に低賃金で「使い捨て」できる「雇用の調整弁」として非正規（派遣・契約・請負など）の労働者を使ってもうけた。資本家にとって労働者はもはやモノ（商品）と同じ使い捨て可能な削減すべきコストでしかないと扱っているのだ。その結果、失業・貧困が増え、社会的権利から排除されて生存権を脅かされている「持たざる者」が膨大に生み出されたのである。鎌田慧氏は「これほどの大量解雇があっても社会問題にならないのは、大企業の労働組合が『対岸の火事』と眺めるだけだからだ」（５・１２付東京新聞）と指摘する。

社会的排除と闘い生存権を取り戻せ

昨年末から注目を集めた「派遣切り」に象徴される非正規労働者の解雇・失業問題は、職を失えば住む家も失ってしまうこの国の下層労働者の現状と、人間らしく生きるための権利――居住、労働、教育、医療、介護等の社会権（生存権）――が、いかに保障されず脅かされているか、社会保障や福祉政策の歪みを浮き彫りにしたと言える。

誤解を恐れずに言うと、偽装請負や日雇派遣が違法か合法かが問題なのではない。どのような雇用形態であれ、全ての人に平等に保障されるべき権利が侵害され剥奪されていること、社会的な権利から排除されることによって、生存権自体が脅かされていることが問題なのだ。労働市場において「雇用の調整弁」として周縁（マージナル）化され、社会保障や雇用・医療・年金等の保険、公的サービスからしめ出されることによって、貧困に苦しみ「社会的排除」を被っている人々、失業といつも隣り合わせの半失業―半就労状態にある不安定な非正規の下層労働者たち、こうしたプロレタリア（無産者、持たざる者、貧民）と連帯し、不公正・不平等でいびつな社会構造を根本から変えていくことが求められている。奪われた「生存権」を取り戻すために、今こそ「新しい社会運動」とそれと連携する「社会運動ユニオニズム」を創り出していくこと、これが何よりも「新しい左翼」にとって緊要な課題だということである。

これまで体制内化した既成の労働組合は、経済危機の根底にあるのは、貧困に苦しむ人々の存在だということを忘れ、社会的諸権利（生存権）から排除された人々との連帯を軽んじてきた。労働・生活・教育の三大社会権が保障されず脅かされていることが、いびつな階級的・階層的な格差を広げ、「新たな貧困」を生み出しているという「社会的排除」の問題にまったく無関心だった。その結果、非正規労働者を雇用の調整弁とみなす企業との協調を優先してきた既成の労組は自ら存在価値を低めてきたと言える。

従来、社会運動や労働運動において周縁的（副次的）なテーマだった差別や貧困の根本には社会的排除の問題がある。そこに焦点をあてモーメントにすることによって差別や貧困問題をも包括し、生きるための社会的な権利と連帯を求めるのが、新しい社会運動―労働運動なのである。

（以下９月号に続く）

プロレタリアの団結を！

5・2－3メーデー闘われる

全都野宿者メーデー 250人が新宿デモ 自由と生存のメーデー 800人が渋谷デモ

5月2日、「野宿者・失業者・持たざる者は団結する！　5・2メーデー」が、東京新宿の柏木公園で、２５０名が参加して勝ち取られた。東京で初めての野宿者メーデーは１９９５年。以来、「屋根と仕事をよこせ！」「排除するな！」と、全都の野宿者が声を上げ、行動する場として例年のメーデーが取り組まれてきた。今年は日雇・野宿者運動の地平をふまえ野宿者・失業者・持たざる者が連帯して、この状況に風穴を開けて闘おうと、飛躍にむけてのメッセージを打ち出した。

集会には、山谷、上野、隅田川、渋谷、新宿、池袋、中野、三鷹、三多摩など全都各地から結集した野宿者をはじめ、初めて参加した支援者も目立った。集会に先立ってこの日のために完成した「労働者手帳」(対都行動を闘う全都野宿労働者実行委員会編）が皆に配られた。労働者としての権利から生活保護の取り方まで、野宿者、失業者、不安定就労の仲間は誰でも活用できるものだ。

集会の冒頭は、今年の「メーデー宣言」が読み上げられ、各地の仲間の連帯アピール。西部圏からは、渋谷のじれんが発言、新宿や池袋の仲間、三鷹夜廻り、中野夜まわりの仲間も続く。渋谷では、来る5月5、6日に、宮下公園で連続して共同炊事、労働・生活相談を取り組むとアピールした。

東部圏からは、山谷、隅田川、上野の仲間が発言。生活保護集団申請やダンボール手帳の獲得の闘いも報告された。さらに三多摩野宿者人権ネットワーク・立川から生保獲得の闘いを報告。

連帯アピールに移り、自由と生存のメーデー実行委員会を代表してフリーター全般労組の仲間、争議団連絡会議、全日本建設運輸連帯労組、外国人労働者支援のＡＰＦＳ労働組合、聖公会・渋谷給食グループ、三多摩自由労組、住まいの貧困に取り組むネットワーク、さらに、デモ終了後の集会で、埼玉派遣村を担ったホットポットの仲間、三多摩共同の取り組みとして成功した府中派遣村の仲間。初めてのアピールも多く、派遣村や反貧困の取り組み、地域住民による炊き出し排斥の動き（浅草聖ヨハネ教会）を許さない闘いなどを通じて、新たな連帯・共闘のつながりが創られつつある。

（上）5.2メーデーｉｎ新宿
（下）5.3自由と生存のメーデーｉｎ渋谷

デモ行進は今年は、沿道の人たちに積極的にアピールしようと、繁華街を1周して公園に戻るコースに。夏のような汗ばむ陽気に、元気よくシュプレヒコールを響かせ、手づくりのプラカードと、賑やかな鳴り物などで、気迫あふれるデモを貫徹した。

解散後、渋谷のウイメンズプラザで行われた自由と生存のメーデー実行委主催による屋内イベント（シンポジウムやワークショップ）にも参加した。

翌日5月3日は、自由と生存のメーデーが宮下公園で行われ約８００名の参加者で賑わった。

簡単なアピールのあと、デモに出発。この取り組みではおなじみのサウンドカーを先頭に、鳴り物、演奏、パペットなど、創意あふれるエネルギッシュなデモで、沿道から飛び入りの若者も。デモの最後尾は、「持たざる者」の国際連帯行動実行委員会、山谷や渋谷など野宿者の隊列だ。パレスチナやＮＯ－ＶＯＸの旗、「持たざる者」の「貧者に対する攻撃許すな！」の横断幕が沿道の注目を浴びる。デモが原宿から渋谷の繁華街へ、さらにセンター街飲食街という、人が密集するエリアでアピール。警察の不当な規制には抗議の意志をたたきつけ、右翼の挑発をはねのけて活気に満ちたデモは、公園に到着したあとも、野外交流パーティーで盛り上がった。

自由と生存のメーデーは、東京に限らず、昨年以降は全国各地に広がっている。「全世界のプロレタリア団結せよ！」と全世界で、日本でも１９２０年代から弾圧に屈せずに闘い抜かれたメーデーは、ここ数十年は、連合に代表されるように「闘わない労働者の祭典」として形骸化の道を辿った。

しかし、５・２メーデーの横断幕にも大書された「野宿者・失業者・持たざる者は団結する！」スローガンこそ、メーデーの原点と意義を表現している。社会的排除を許さず、公正・平等・連帯の労働運動を大胆に構築しよう。

９条改憲許すな！御堂筋デモ

5・3共同行動（関西）に360名結集

岩田吾郎

「御堂筋を埋め尽くすデモ」を掲げ、９条改憲を許さない！ 5・3共同行動

憲法記念日、３年目になる５・３共同行動は３６０名が結集し、熱気ある集会と御堂筋デモが勝ち取られた。

集会は、急逝された集会呼びかけ人の一人でもある、川村賢市さん（全日建連帯労組副委員長）を偲んで黙祷を捧げて開始された。冒頭、主催者代表の新開純也さん（９条改憲阻止の会・関西）からこの３年間の動きと闘いを振り返りつつ、潮目の変化、世界恐慌の発生等に際して、①６・１４東京、１０・１２大阪、１０・１８京都集会の共同行動②総選挙に対する改憲に反対する政党、個人への投票③反貧困・反失業・反差別の労働運動の再生が提起された。

「東アジア・『在日』・沖縄から学ぶ平和憲法の創造…」と題した丹羽雅雄さん（弁護士）は、自民党の改憲攻撃が、「国柄（国体）」の強調から、新憲法の制定であり、人民の憲法制定権の剥奪であり、クーデターだと断じられた。工藤美禰子さん（浄土真宗東本願寺僧侶）の歌「同志は倒れぬ」等に続いた。

休憩後、服部良一さん（参議院議員・山内徳信秘書）の国会報告がなされた。現場からの報告は、松下プラズマディスプレイ偽装請負原告非正規労働者の吉岡力さん、「君が代」不起立処分門真市立第三中学校の教育労働者川口清吾さん、戸田ひさよしさん（連帯労組近畿地方本部執行委員長）からなされた。最後に、仲尾宏さん（１０・１８反戦共同行動きょうと）から９条改憲阻止！の街頭に出る、新たな共同行動の拡大が訴えられ、「インターナショナル」を斉唱して終了した。デモは途中からの参加者もあって御堂筋に「９条改憲阻止！」のシュプレヒコールが轟いた。「労働者派遣法を撤廃せよ！」「食べられる給料をよこせ！」等を掲げ、窮迫する「失業」労働者の闘いとの結合、パレスチナ解放等の労働者・人民との国際連帯等の課題も焦眉の課題である。２００７年に開始された５・３共同行動は大阪で「一つの闘争陣形」を生み出した。「九条の会」集会（京都５０００名、大阪１２００名）等の「９条改憲阻止！」の機運と運動と連携し、「街頭行動」で９条改憲阻止の闘いを創りだした。本年は、多様な団体・個人の自発的参加が目立った。又「排除と対立」を繰り返した政治的大衆闘争に対して「新たな共同行動」を模索するものだ。

１０・１８反戦・反貧困・反差別京都共同行動－関西の新たな共同行動の模索！

関西から登場した新たな共同行動・政治闘争の特徴は、「政治」を従来の政治団体・労働組合・市民団体の「共闘」一般ではなく、労働者・学生・市民の、まず個人としての自発的・自主的な「政治決起」を第一義的に模索したものである。様々な社会運動、文化運動にも裾野を拡大して新たに「政治」を問い、政治決起を促すものだ。

同時に現在の政治闘争の基礎として、反貧困・反失業・反差別等の「社会運動ユニオニズム」による労働組合運動の再建を模索するものだ。非正規労働者等を中心としたラディカルな労働組合の再生と共に、現代の労働運動は、自主管理・産業政策協議会・労働者「事業」・ＮＰＯ等の領域を、資本主義に対抗する運動－「陣地戦」として展開している。そして、再び政治闘争との結合の条件を生み出しつつある。

さらには、大衆的政治闘争・全人民的政治闘争の再生は、現代革命に於ける「統一戦線」戦術の再考を不可避のものとして問うている。今日の共同行動は、日本共産党、社民党、新社会党等の議会政党も含まれるものとして形成されつつある。ただし、歴史的にスターリン主義者や社会民主主義者が行って来た事を想起すれば、「新しい左翼の極」の形成が不可欠である。「新左翼」党派であれ、政治党派の再編成は不可避である。共産同・革共同を中心に形成されて来た新左翼は、再び、歴史的な再生が問われ始めている。

求められている事は、「新しい左翼の極」形成に向けて、旧来の政治党派、分派の系譜に囚われない「政治思想的論戦」を行う場の創出である。ＫＣＭ（関西共産主義運動シンポジウム）は、関西の地でこの任務を果たして行くであろう。

憲法９条改定を許さない6.14 全国集会

・6月14日(日)午後1時
・社会文化会館ホール
(主催) 6.14実行委員会